

歴史探訪 (5)

日本のアーチ式石橋を訪ねて (1) ～通潤橋を造った種山石工～

26期 兼田吉治

私は2010年から2015年までの5年間、母の介護のために年に4回ほど熊本に帰省していた。母は92歳から特別養護老人ホームに入所して2010年当時94歳で要介護3であった。当初は大阪南港から実家である球磨郡まで単純往復していたが、母の状態は安定していたこともあり、往路は九州各地の歴史的な場所を訪ねながら帰省していた。それは熊本のアーチ式石橋群であったり、飫肥(おび)の城下や、鹿屋航空基地資料館での神風特攻の記録などであった。

これらの歴史を探訪した中で、日本のアーチ式石橋を造った技術集団「種山石工」のルーツや歴史に名を残す石橋について、2回に亘って触れてみたいと思う。

日本のアーチ式石橋

空を横切る半円のアーチ、積み重なった石が織りなす絶妙の姿。写真1は石造単アーチ橋の通潤橋である。宮崎県延岡市から国道218号線を西に走り分水嶺を越えて熊本県緑川流域に入ると見事な石橋群が点在する。熊本には記録に残るだけでも全国のアーチ式石橋の約半数600基が集中する。中でも県中部を流れる緑川流域が最も多い。それには訳があって、日本のアーチ式石橋を造った技術集団は肥後藩種山村(現熊本県八代市)を拠点とする種山石工であった。

アーチ式石橋は石を積んで作られている。石積み文化としては、日本でも城郭建築に石垣が多く用いられており、穴太石工集団など戦国時代(1570年代)から見事な城郭石垣が多く造られている。また、古墳墓陵にはアーチ様の石組も見られる。しかし、アーチ式石橋は江戸時代末期まで全く見当たらない。日本のアーチ式石橋は江戸時代末期(1800年代)から明治、大正・昭和の半ばにかけて九州を中心に多く造られた。中でも明治中期までは熊本県が圧倒的に多い。江戸時代より前に日本にアーチ式石橋が伝来しなかったのはなぜか? 岩手大学の宮本等は土木史研究第13号の中で「アーチの技術が江戸時代より前に日本に一度は伝達したものの日本の風土にあわないと判断され定着しなかったのか、留学技術者や技術交流をした当時の日本の技術者がアーチ技術のすばらしさの説明を受けても日本に導入する必要性認めなかったのか、現在は不明である。」と報告している。[3]

日本に初めて石造のアーチ橋が造られたのは、1634年(寛永11年)長崎の眼鏡橋である。中国から来日して興福寺の2代目住職となった黙子如定(もくすによじょう)によるもので、石工は中国から呼び寄せて建造したとされている。熊本に石橋が造られるのは、それより約150年後になる。当時日本に伝えられていた諸技術は中国伝来のものであり、アーチ式石橋は日本人には皆目見当もつかなかった。

種山石工

種山石工の祖は、藤原林七という長崎奉行所の武士である。林七は長崎の眼鏡橋を目にし、アーチの下に支えもないのに崩れることなく建つ橋の構造に興味を持ち、当時出島に滞在していたオランダ人から架橋のための円周率の計算方法を学んだと言われている。当時は鎖国下で外国人との接触を禁じていたため、その職務を越えたつき合いぶりが幕府の目にとまり、身の危険を感じた林七



写真1 種山石工による通潤橋(熊本県山都町)



写真2 日本一の単一アーチ式石橋 霊台橋

は侍を捨てて逃亡を企てる。各藩の往来が自由に出来ない当時である。彼は長崎～肥後往復の船にひそみ、命からがら肥後に渡り種山村（現八代市東陽町）まで来る。種山村には大きな採石場があり、ここで石工の宇七と出会い石工の技術を学ぶ。藤原姓を捨て種子山姓を名乗るようになった林七は、アーチ式石橋技術を身につけ、実験をかねて文化元年（1804年）初めて小さな石橋3基を建造した。これは林七自身が建造した唯一の石橋である。林七は息子たちにもてる知識と技術の全てを教え込んだ。そして地域の石工をまとめ種山石工を組織してアーチ式石橋技術を伝授した。父から子へ、子から孫へと伝えられた秘伝の技術は各地に見事な花を結び、一族の地位を不動のものとしていった。



写真3 岩永三五郎による鹿児島甲突川 西田橋

中でも、林七の直弟子“三五郎(宇七の二男)は、土木事業全般に優れた技術を持ち、その技術は神業とまでいわれた。通潤橋の手本となった雄亀滝橋(おけだきばし)を造って名声を得た三五郎は、八代の干拓工事に従事し、その功績により、苗字帯刀が許され「岩永」の姓がおくられる。その後、薩摩藩の要請により鹿児島で1840年から9年間に西田橋(写真3)をはじめとする36基の眼鏡橋を造った。



写真4 肥後の石工による皇居の正門石橋

また、もう一人の種山石工を代表する名工が、“橋本勘五郎(丈八)である。丈八は林七の長男“嘉八”の三男で、石橋文化のピーク時に活躍した。歴史的に有名な矢部の通潤橋を完成させ、肥後藩より苗字帯刀を許される。その後、明治4年(1871年)に明治政府に招かれ宮内省土木寮勤めとなり、万世橋を明治6年に、翌年に浅草橋と蓬莱橋、更に皇居の正門石橋(写真4)や日本橋、神田橋など次々に手がけ、それまで大火の度に焼け落ちた木造橋を優雅で強固な石橋に代えて、「肥後の石工」の名声を全国にとどろかせた。

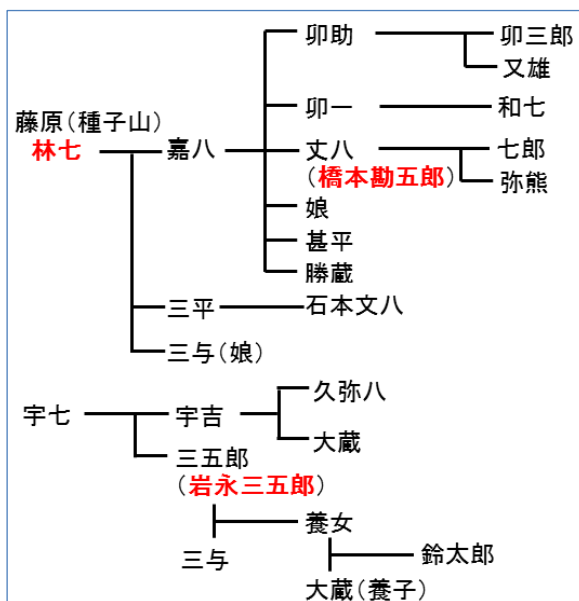


図1 種山石工の家系図

図1に種山石工の家系図を示す。江戸期から昭和30年代までの間に、石工達によって架けられた石橋は記録に残るだけで熊本県内に600基。名が残る石工は160人を数え、その中で発祥の地とされる種山石工は約20人で、多くの名橋を残したとある。

幕末に忽然と現れ、70年間ほど活躍して忽然と歴史から姿を消した種山石工。水利に恵まれなかった白糸大地に水を送るために逆サイフォンを採り入れた水路橋である“通潤橋”や、国指定重要文化財となっている日本一の単一アーチ式石橋“霊台橋”(写真2)など、種山石工が架橋した名橋や、その工夫と活躍ぶり、更に高度経済成長期に石橋がたどる道などを(その2)で探訪してみたい。

参考資料

- [1] Wikipedia : 通潤橋、霊台橋、肥後の石工、種山石工、雄亀滝橋、他
- [2] 美里町ホームページ : [観光・特産]>[石橋案内]
- [3] 土木史研究 第13号 1993年6月 岩手大学工学部 宮本 他「アーチはどのようにして日本に伝えたか」
- [4] 熊本県公式観光サイト><まもと Look>ふるさと寺子屋>熊本の石橋文化